

合格者座談会

いま「第二期生」の
重みを実感しながら

もらった名刺には、「司法研修所第新60期司法修習生(予定)」という文字があった。

小さな文字の大きな誇り。新司法試験第一期合格者の証しである。

出身大学の異なる3人が、中大ロースクール2年間の

「結実」と「これから」を語り合った。

司会：学生記者 滝沢孝祐(総合政策学部3年)
長浜有平(法学部法律学科5年) 来春中大ロースクール入学予定

Tsunoda Kazumasa
角田勝政(33)
北海道大学法学部卒業
Hashimoto Sachiko
橋本幸子(25)
中央大学法学部卒業
Saitou Masayo
佐藤真代(24)
慶應義塾大学法学部卒業

合格の瞬間

——合格おめでとうございます。

合格発表は9月21日午後4時、でしたよね。どういう形で合格を知ったのか、その場面を再現してください。

角田 合格者が張り出される法務省の掲示板前に、「結果が良くても悪くても受け止めなくては」と一人で出かけました。家族も一緒に行くと言っていたんですが、「それだけは勘弁してくれ」と(笑)。

やはり掲示板の前に立つ瞬間はドキドキでした。掲示がされ、パーッと目をやって探す。「あった!」。嬉しいというよりも、ホッとしましたね。体の力が抜けていきました。妻と子どもがいることもあるかもしれませんが。

——お子さんはおいくつ?

角田 ロースクール在学中に生まれて、今は2歳半です。ロースクールで勉強できたのは、妻の理解、また双方の両親の理解が大きかったです。

すね。発表後は握り締めた携帯で妻に電話して、そのあとに妻や私の両親と立て続けに連絡しました。

佐藤 私は自信がなかったのですが、掲示板の前に行つて番号がなかったら、おそらく「正気では帰ってこない」と思い、インターネットで発表を見ました(笑)。掲示板での発表は4時で、ネットでの発表はその30分後。「もう結果が出ているんだ」と思うと、30分間は頭がおかしい状態で家の周りとかをぐるぐる回って

いました(笑)。

回線が混んでいてつながらず、やっと接続できて……番号があった。でも、本当に自分の番号かどうかからず、自信がなかった。親に受験番号を伝えて「確かめて」と頼んだんです。それで、合格を確認して、「ああ、受かったんだ」とやっと実感したんです。

次の日、法務省に行つて、人がいない掲示板をバックに写真を撮りました。

橋本 私は高校や大学受験で、発表を見に行つて受かった経験がないんですよ。だから、今回は絶対に見に行つてはいけないと、見に行きませんでした(笑)。

ネットはつながりにくく、ドキドキしながら待っていたら、なんと……父親から携帯に電話があつて「おめでとう」って。自分で現認する感動はちよつと味わい損ねてしまいました。

——お父さんは何と……。

橋本 恥ずかしい話ですが、父が泣いたのを初めて見ました。泣きながら言葉に詰まる感じで、「おめでとう

とう」って。ジンとしました。

ロースクール進学 中大を選んだ理由

——簡単にプロフィールを。角田さんは会社員からの進学ですね。

角田 ええ、私は北大を出たあと、その時は法曹になるつもりもなくて、東京で石油会社に就職しました。3、4年たった頃から、学んできた法律を専門とした仕事をしたいなという思いが強くなった。そこで仕事を続けながら二足のわらじで旧司法試験の受験を始めたのです。ただ、仕事の傍らでの受験勉強は厳しかった。よい結果は得られなかったですね。そんな矢先に、ロースクールができました。

「やりたいことにチャレンジしたい」と妻や双方の両親と相談し、みんなの理解も得て転身を決めました。会社を辞めたのはロースクール入試の4カ月前でした。

佐藤 私は慶應義塾大学の法学部でも政治学科でしたから、法律の勉強はさわり程度だったのです。でも「意外と法律って面白いのか」と

思えてきて、法律学科のゼミに入っ
て、法曹を目指して勉強を始めました。
橋本 私は石川県の高校を卒業し
て中央大学へ。中大に入学したのも、
小さい頃から法曹になんとなく憧れ

ていたからです。研究室に入って司
法試験をめざす仲間が多かったので、
しだいに勉強が面白くなってきまし
た。

——みなさんはロースクール1

期生。ロースク
ール自体の情報も方
向もやや不透明な
中で、なぜロース
クールへ、また、
なぜ中大を選択し
たのですか。

角田 そうです
よね。まだどの大
学も開校していな
くて、本当に情報
が乏しかったんで
す。その中でパン
フレットや、説明
会に足を運んで決
めた覚えがありま
す。なぜ中大かと
いえば、中大のパ
ンフレットや説明
会は、ロースク
ールにかける意気込
みや熱意が他とは

違いましたね。

そして、法曹界での実績もやはり
魅力的でした。

佐藤 私はロースクールに進学す
る気持ちはあまりなかったのです。
もうロースクールの願書が締め切

られる頃に友だちと話をしていたら
「試しに受けてみれば」と言われて、
「じゃあせっかくだし、受けちゃお
うかな」と受験した。それが正直な
ところ。

説明会も既にすべて終わっていて
行けずじまい。パンフレットやネッ
トだけが手ばかりでした。中大に決
めたのは、卒業後の進路として多様
な法曹像が提示されていて、きつと
さまざまな勉強ができるんだろうと
思ったからです。でも、中大は試験
科目に英語がない、というのも大き
かった(笑)。

橋本 それって、大きいよね(笑)。

佐藤 そうですよ。結局、中大と
早稲田を受けました。早稲田は縁が
なかったようで(笑)。

院生と同じ目線で

橋本 私たちが1期生ということ





橋本幸子さん



佐藤真代さん



角田勝政さん

もあると思いますが、中大は院生の人数に対して先生の数がものすごく多い。また、先生が教壇の上ではなく、フラットな高さで講義を進めるのが印象的でしたね。

角田 法律基本科目、いわゆる六法系の科目は1クラス約50人で、私たちの学年には5つのクラスがありました。それはまさにフラットで、ほとんど同じ目線という形で講義が進んでいった。

橋本 教える——教わるという感じよりも、先生がクラスの議論の流れをコーディネートしていく感じでした。むしろ教わったことが多いですけど(笑)。

角田 双方のやりとりはもちろんですよ。先生たちも一緒に考える感じですよ。

佐藤 先生たちも私たちの顔を覚えていて、1期生だったのでロースクールの運営方法や講義の進め方なども「何か意見があったら言ってみてね」とか、みたいな感じで、学部とは大きく違いましたね。

角田 国立大学(自分は北大しか知らないのですが)は、ちよつと言

葉は悪いかもかもしれませんが、放つたらかというか、「自由にどうぞ」と。あまり面倒見がよくなかった。その点で、中大ロースクールは本当に親身で、質問に行くと、じつに丁寧に答えてくださる先生方がほとんどでした。それにOB・OGの弁護士が「実務講師」として答案演習をやってくださいって、勉強になりました。そういうマンパワーは、中大だからここまでできるんだなという印象で、先輩を育てようという意識もしみじみ感じました。

ロースクールの実際

——学部教育との違い。ロースクールはどのへんが違いますか。

角田 ロースクールに入学して思ったのは、じっくり考える授業が中心だということです。例えばある事例について重要な判例を覚えるだけでなく、なぜその判例や結論が導かれるのかを、じっくり考えていく。先生がいろいろな人に当てながらやっていくのですが、「ああ、法律を理解する、勉強するとはこういうことなんだな」と実感しました。い

ままで自分がやってきた勉強はどうしても表面的でうわべだけだったな、と思います。だからこそ予習が大変でしたし、授業数も多くて本当にハードでした。

佐藤 周囲に勉強している仲間がたくさんいたのは何よりもよかったです。みんなと議論するなかで、自分では考えつかない発見があったりして。今まで学んできた(例えば現行試験対策の勉強)基礎があるから、より深く考えられ、議論する機会が増えたのだと思います。

それまでは本当に試験科目だけ勉強すればよかったんですけども、違う科目とかも履修の関係上、絶対取らなくてはいけない。法律ばかりやっている、頭が固くなってしまったらするので、それ以外の科目とかも履修することによって、気分転換になったりとか、柔軟な思考が身についたりとか、そういういいところもある。一方で、司法試験科目の勉強と授業のバランスがとれないときはジレンマを感じましたね。試験科目とは直接関係ない講義のレポートなどで、結構な時間を割いたりし

て……。また、日常の予習も深く入り込みすぎると、その項目ばかりに目が行きがちになり、全体像を忘れてしまったり。この2年間は葛藤することも多かったです。

橋本 現行の試験対策をやっていたときの勉強は、何となく基本書の中の世界という感じがして、あまり現実味がなかったんです。

でも、ロースクールに入学してからは判例や事案をきちんと読むようになりましたね。あとは、エクスターンシップの経験も大きかった。机上の空論ではなく、「現実の世界で起きていることを、私はいま学んでいるんだな」とリアルな感じがしました。

《エクスターンシップは、法律事務所や企業の法務部門や官公庁などに研修へ行くプログラム。春休みや夏休みに3週間ほど行われる》

——みなさんはどこで研修したのですか。

橋本 立川にある法律事務所に行きました。事件記録を読ませていただいて、弁護士の先生と行動を共にして、依頼者との打ち合わせに参加したり。先生に「質問していいです

よ」と言われたときには、いろいろ質問をしました。

角田 私は四谷の法律事務所で、佐藤さんとも一緒にいましたね。面を作ったこともありましたね。研修先は中大出身の法曹名簿があつて、その中から選ぶんです。そういう点では、中大はやはり層が厚いですね。

——2年間のなかで一番のプレッシャーは？

佐藤 一緒に勉強している仲間の半分は、少なくとも合格するんだという意識はあつたので、そういう意味でのプレッシャーが私には大きかったですね。

橋本 ロースクールに入学する前は、合格率はもつと高いと言われてなかつた？ もう少し高かった気がして、合格者のおよその数字が報道されるたびに、そんなはずではなかつたという気持ちもありました。

角田 日ごろ一緒に勉強していて、優秀な方もいますが、だいたいみんな実力は変わらないと思います。「どんぐりの背比べ」だと思っていたので、その中で合格率は5割程度に落ちるらしいという数字はかえってキ

ツかつた。当初、7割とも8割とも言われていましたから、みんな切羽詰っているというか、後期からは学校の雰囲気も何となくピリピリしていましたよね。

佐藤 私はのんびりしていましたけど（笑）。みんなが仲の良いクラスだったので。でも、個人的には試験直前の4、5月は憂うつというか、プレッシャーを感じていました。

——新司法試験は法科大学院を卒業してから、5年の間に3回しか受験できない。中には仕事を辞めてロースクールに入学した方もいるわけですから、焦りや心理的な圧迫感はありませんか。

橋本 ありましたよ。自分がおかしくなりそうになった（笑）。

佐藤 逆に合格率が高いだけ、プレッシャーが大きいというか。

——従来の試験のように数%だったら、諦められる。

角田 それはありますね。

信頼される法曹に

——11月末から司法修習（1年間）が始まりますね。どのような方向を

目指しているのか教えてください。

角田 今は、一般民事を扱う弁護士を目指していて、色々現場をみたいというのが正直な気持ちです。

依頼された事件の一つひとつを、クライアントの人に対して真摯に、誠実に対応できる、信頼される弁護士になりたいです。

また、ロースクールで初めて行政法を勉強したのですが、興味をもちました。時代の流れが官から民へと変わる中で、行政の役割も変わっていく。そんな時代の中で、行政法の知識を生かした行政訴訟なども手がけたいと思っています。

佐藤 私も弁護士志望です。分野はまだはっきりとは決めていないのですが、さまざまな案件にチャレンジして、「この人に頼んで本当によかった」と思われる弁護士になりたいです。

橋本 私はどちらかというと刑事系が好きでした。実際にはまだ分からないのですが、「被害者の立場になって考える」信頼される法曹をめざしたいと思います。

——活躍を期待しています。